

「範となる」こと

「教師は子どもの範となれ」……！？

私にも若いころがあり、自らを教師として高めるための銘としてそれなりに努力した時期がありました。「子は親の背中を見て育つ」という言葉があります。親を教師に置き換えて、ただひたすら子どもたちの先頭にたってやって見せた若い時期が私にもありました。そのことの是非を今問うつもりはありません。ただ、「範となる」ことを教育の必須条件と考えてしまうととても窮屈な教育活動になることも事実です。

極端な例で申し訳ありません。ピアスをしている教師がピアスの生徒の指導をするのはどうでしょうか。おそらく保護者の多くの方は「説得力に欠ける」とお思いでしょう。茶髪もきっとそれに近いでしょう。私も同感です。しかし指導できないかといえば私はそうは思いません。

次の場合はどうでしょうか。女子生徒がコッテリお化粧品をして登校したとしましょう。前述の論理で考えれば生徒のお化粧品を指導する場合、その指導教師も(女性であった場合)すっぴんであるべきという論理が通ることになります。一般社会に比べてどちらかといえば価値観が均一的な教育現場に特に陥りやすい論理であると同時に、最近では世論までもがそういった論理を後押しする風潮まであります。

大人の女性が相応の化粧品をすることに何らためらう必要はありません。それが教師であっても規制があるはずがありません。(もちろん程度はありますが…)

私は「教師が範となる」ことは教育の多くの場面で欠くことのできない教師の資質であると思います。しかしそれが「いつでも」そうあるべきとは思いません。そこには大人(教師)のあるべき姿や許容と子どものあるべき姿のちがいがあり、またそのことを胸を張って教えることこそが公教育であろうと考えます。

教師を子どもの社会的立場と同等に引き下げることが「範となる」ことではありません。